



繪本小栗外傳

初篇

五



13
3249
1



門へ 13
3249
1

昭和十一年
一月二十四日

寒燈夜話 小栗外傳卷之五

東都 絳山歌醵陳人戲編

神代
神代
神代
神代

第九編

貞婦夫婿の待て跡を全き
良馬名士に達て能を顕を

且説其時一人の了髪出でて這裡に入らせよ人と助守がくまを取て
おぐらうのうらぬ処も透あふ六十餘りの老女待らけて茶しくれを御君の
え忘れやあまあらめ焼の庄司が母あて侍りぬ何れに
やえをうりいふをうりうと喜やよとりのたれ助重不
か母あ差つぎれがたれは敬らばこそ何も奈何と思ひま
達か下とつとと涙と涙ふ番の追理の是れ
あり何ぞ前の中

いさかひかして君と許家あま照天姫
君を又多し強て此家よ誘ひまへり。とゆへに知を助を再
あて城をえり。いと怪しとてあ照天の家ありといひまつく不
暗さる。其故よりみゆ。眉を疲めて同く城へ噴噴つ
語出る。姫君此地方へ入つるありして。前年名武の家亡び
まひし折うら姫君の叔父君横山を郎安秀との侍従君と姫君と
は。詔をえ退まひ。下を吟呻けり。横山及若うり。附五人の男子
を。おし。没落の。南。附。乳。人。不。誘。引。行。出。給。れ。ど。り。しが。五人の男子成
人の。后。身。の。う。り。れ。お。き。ま。う。に。緑。林。の。群。よ。入。り。終。小。賊。の。大。將。軍。と。あり。
此。地。方。小。縣。と。居。り。郎。安。秀。と。の。こ。と。を。知。り。尋。す。の。ま。ら。う。て。お。れ。ぬ。
頼。之。終。よ。親。子。六。人。白。波。の。橋。架。し。て。いと。豊。か。世。を。送。り。ぬ。五人の男子

といふ嫡男を郎安秀二男と次郎安春三男と三郎安武四男を四郎
安高五男と五郎安永といひ。渾力量早業の悪徒。然るを郎安秀
次郎安春の二人姫君を。想。し。足。争。あ。て。思。と。る。あ。そ。父。の。横。山。と。れ。を
えて。心。裡。お。ち。り。あ。り。各。武。が。家。の。こ。と。然。る。人。を。照。天。に。配。遇。ハ。家。名
を。再。與。し。ま。り。と。濃。倉。と。の。命。の。は。豫。て。一。色。の。云。は。る。こ。も。あ。ま。を
我。見。照。天。を。患。と。る。こ。を。車。な。り。一。人。の。子。を。り。て。照。天。と。妻。婦。は。名。武。の
家。を。再。無。き。し。旧。領。を。復。し。ま。り。こ。を。樂。し。か。ら。し。と。相。言。は。し。け。姫。君。は。親
子。一。斯。と。知。し。ま。り。お。し。う。り。の。親。子。と。の。の。り。い。い。と。る。百
ふ。お。ぼ。し。が。ら。せ。ま。い。ま。と。い。ひ。遊。び。一。日。の。後。は。行。儀
君。の。あ。ま。り。お。こ。れ。を。苦。し。病。ま。り。終。つ。て。お。ち。り。ぬ。故。多。し。お。ち。り。ぬ。
姫。君。世。や。終。み。な。り。は。涙。の。乾。く。ひ。ま。も。た。く。あ。ら。う。と。次。郎。安。秀。を。送。り。ぬ。

尉心の只顧我子と誓縁のこを劫まど姫の堅く辞多入り。されども安
秀そんまきで。密をを郎安徳をりて女婿よせん。後れば二郎安徳を
忍心身をりて娶んとされ。兄姫みほしく。闘争にもあやびねべう
えのうふ父の横山も。いと愁ひ。夢対誓縁の沙汰止まぬ。再ハあれ
ど終りも。我子のうら一人を照天ハ娶せ名武の家を押領せんと想
公頼あれ。免角ハ姫君の公をとり。新婦おせを。とりうくに愛恤
ま。似ハ。姫の宣のこを。何事はくも。その云が。あくなき。おんね
これ恩を。負せて。其子と誓縁さ。と。入れ。ある。あり。姫君ハ。いと。猪一
唯針の。越よ。は。さ。る。ごとく。此ら。ち。ふ。君。の。在。家。を。尋。此。地。方。を
逃れ。出。る。んと。お。ぼ。せ。ど。使。を。美。る。人。も。な。く。自。ら。出。る。入。る。深。空。お
生。ま。る。入。の。世。間。の。る。の。東。街。西。街。と。お。知。し。ぬ。さ。ら。心。は。念。ト。す。ふ。の。み

あていと患ひ屋。あふ折ら。枕鎌倉。所用ありて。まわりは。つる。お
道を。過。失。の。処。ハ。吟。呻。ひ。此。家。ハ。一。夜。の。宿。り。取。を。ぬ。ふ。其。夜。姫。君
の。心。前。ハ。お。ま。ま。と。お。事。は。い。す。あ。う。ち。焼。が。身。の。入。の。こ。と。お。へ。の。げ
え。り。が。既。ハ。お。前。を。退。出。臥。下。ふ。入。く。睡。ま。つ。つ。ん。と。と。る。と。お。姫。君
忍。中。り。ふ。只。一。人。焼。が。枕。辺。ハ。あ。り。奴。亦。ハ。助。重。君。と。許。家。あり。照。天
なり。汝ハ。我。ま。ハ。由。緒。ある。人。な。れ。ば。夫。れ。在。家。を。知。り。は。ら。ん。今。う。ひ
密。つ。誘。引。お。ま。と。と。と。余。あり。し。う。と。多。氣。落。城。の。後。ハ。在。家。を
知。り。ち。も。お。給。が。其。中。の。り。れ。ま。に。告。す。お。し。し。は。あ。ら。ん。今。う。ひ
此。亦。ハ。居。て。奴。亦。ハ。力。次。添。て。よ。と。と。ま。り。命。の。乖。ハ。か。く。ま。よ。り
姫。君。ハ。給。事。一。名。を。正。と。と。れ。是。夜。ハ。側。ハ。侍。り。し。ぬ。焼。心。お
君。の。在。家。と。お。知。し。ぬ。姫。を。使。ひ。ま。る。お。し。以。夫。婦。の。面。對。面。は。し。し

まんと只顧君の風声を窺ふ折ら不料う姫君君はえりけり
とれど切まなれぬえり多しなるのみなるも人差のけしきも是れ東の
明白も名をふらむと強て此家よ誘引せしめて其実否うはれし
君あてあつたがえんましむ此年迄の憂を告げも用もつりありん
おぼしめしとさわれ横山との常く殿のふをが好く忌嫌へは害心を
懐くと必定なまが此処へ誘引せしむるを安秀いめんと包み
あつたがえりとのことを公に會もひ今夜蜜は姫君おぼしめし
尚委まはせしめせ然れども只今も中きとて横山とのへは隠
あつたがえり今対面ぬんは然るべし後一人は此睡あつたがえり
蜜お安内しつらぬとせしと故の別室お送り出で我子庄司お對
面し小栗よ父へあつたがえり述ぬるよ今夜姫君をおし

まんとお淋しくおをぬる道の衛をるまんとよし私語おひ
姫の方へお去りよけし小栗の従臣このことお姫君の事お兼て及
る。今此処に在るお知の御付も置まぬべしあつたがえり奈何と
うおひまわらせんとお織區なる。判官代助重直のことも天下度
とれど我は容膝の家なるに殊に天を共おせしはの能く一色詮秀と
おあつたがえりそれを討んと此所お来ぬら一女子のたふし志急
速うおせしめしお入の子なるの道おぬる不知らや此地方とま
鎌倉お母おお一色詮秀を討んと父の御羅を易うおせん人その
おをぬるよしとあへまぬらお母お母王の御分はしとあつたがえり
助をを借んとて小栗お對ひ仇討の御鎌倉おお討けおしし
由豫とてお討ぬらぬかて本意を遂目出たは還るその御親

百人 六十一

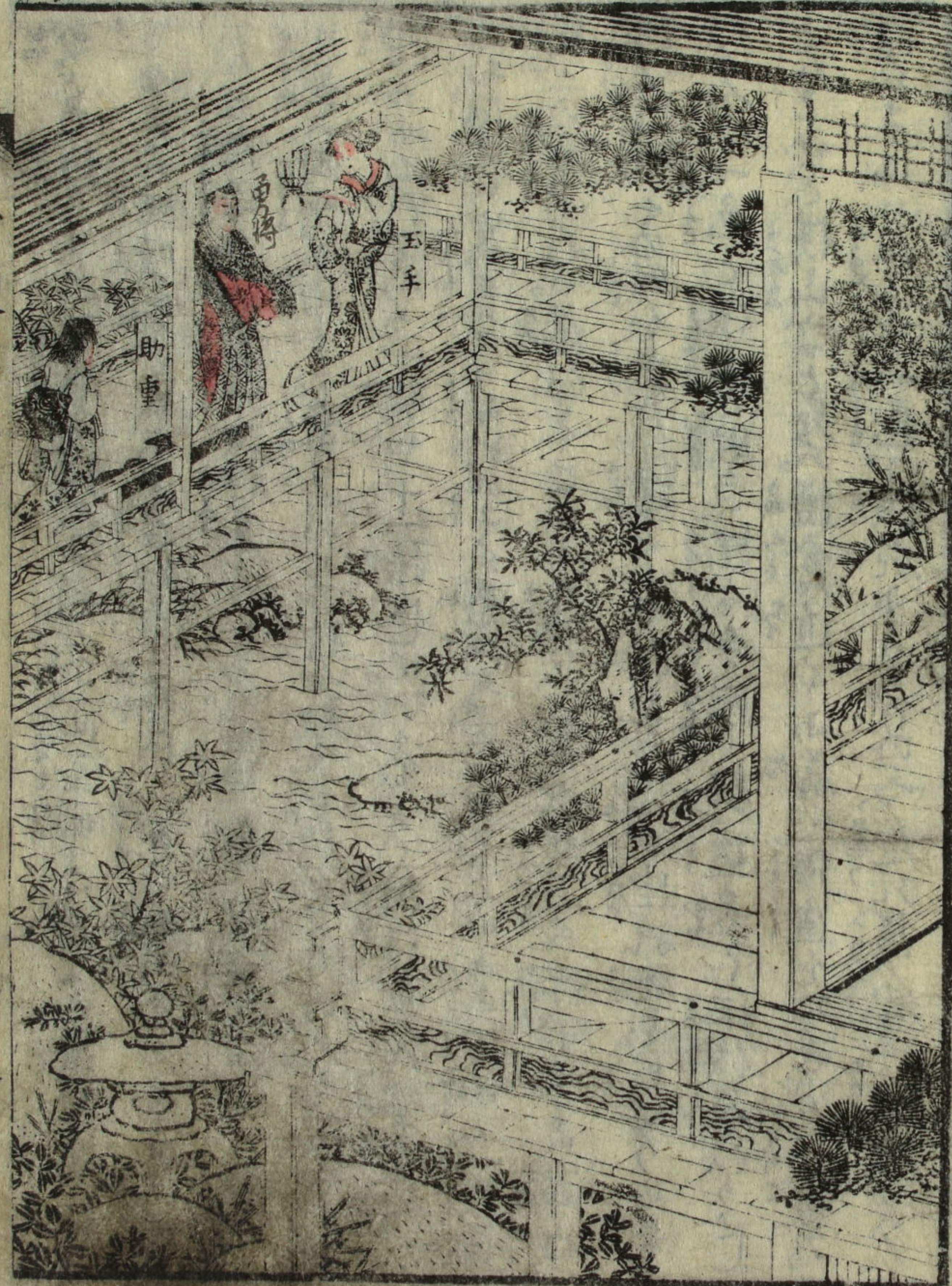
四

花樓

助重
奇遇
做



照天姫



百傳

玉手

助重

五ノ...

聖との許しつれ妹脊を結ひとるべし。世事姫よ又へよと道理を言はせ
 せよとて、咄咳咄とこころを知らしむるまじし一色の勢ひあることと執事
 よりの尚坊の鎌倉中へ往來するまじし百餘の者の従者あり其数
 光景の御所は均しく當直のりの数を知らざりしがりの人を討入る鬼
 神もあれり十騎や十一騎はしてしうてよく討つるは一色を討入
 とおぼする窟竟のふれぬその奈何なるもそとといふ横山と一色
 無二の交のれぬ心むくくあまのこあり其所の後十人満ね
 供人ありその耐を察し入途よく討つるは袋中物を取るも易
 かるべし一色と横山と睦まじく今國々群盜多く征伐及ひし
 とりせと横山がとる徳倉近くお居て強盜をなせと討つる
 向らざる正しく一色が洪庇ふよりの之を危れ鎌倉へ赴きしり

この地方に忍びて姫君とよみ議り一色がするを待て復讐を
 と練められ小栗少しく幼幼と十人の豪傑おも玉手かきあふ
 はりしと只願凍勃せし助重実を思ひ入りの練は従ひり
 娘の喜びいざらに遠裏におもせよと助重を伴ひて姫の園は清川
 多夜助重を園中に入らしてその光景はるるまじし物数寄お匠を
 せし美藤藤あつるお空の草ありあるはひひと清らるる
 たる文机は娘のうらりれはく物想ひしうるまじなるは今助重の
 するおらち敬らるる顧る光景の眉の楊柳の翠と樹の影の芙蓉の
 花も好まる肌を雪ふ光を添はるる腰を結束たるお似り
 雲間を分て時出る月よりも尚美しく天然の姿色概本おもひり
 あはれ比せや正足蓬萊宮裏の神仙よあはれとかなるる玉璽

月下の仙女ありんとはとて石心鐵肝なる助重も心魂天外に飛脱忽
 として着とれり。其時玉の姫と對ひこの年比年しおやと殿乃
 びとてり何れも念に終ひて限なくやへりて悪業を慰
 める。と銚子土器とり出でしぎまじりせと幼むねの助重も天よ打
 しつゝ。月と某と親の免せし妹脊おがら互の家の凶害は結比
 同とらなりはほど。姫の生死を知らぬ。君の年の預ね道とも
 他一女を親達せん是我父の命をさしておん身を忘れざる所と
 ちつろふ今夜不圖ふとあらんと正は是女婦の縁れにさる證と
 ろふ。されば誓ひ做ともなる妨あるまじけとて縁てはめ及びまひ
 ろん某父満重の二色淫秀の誹よよるて君の心勘氣が業の業を
 の城おわいて生害せり。然るに父の仇を二色あり。今生一色は討く

父の徳羅を易くせん。此所までするはつろお其道はして。姫と
 誓縁せんこと孝おあふ。此道理を聴くは久世を復して。后誓を
 做もほく。其志氣の差り。前ふまじしはつろ。化はぬ。せ
 ぶねをりて。誓ひの理を。て。おね。姫と小栗が。の所赤
 入て。憐れ。へ。且喜ひ。且嘆。免。角の回。意。せ。り。が。想。ひ
 まらせ。横山安秀。明日。あ。も。我。子。と。誓。縁。さ。せ。ん。と。や。へ。ま。が。い。く。あ。せ。ん
 やと公苦。漫涙。お。か。ま。き。く。道。し。が。漸。あ。つ。て。云。お。ら。ら。君。は。志。氣
 の。程。ま。つ。こ。お。姫。と。も。忝。し。も。言。語。お。れ。の。述。け。れ。だ。君。と。奴。家。が
 妹脊の間の。あり。ま。け。誓。の。比。よ。り。して。親。の。許。世。縁。故。の。是。之。父。乃
 横死。お。家。に。母。と。つ。ら。と。悪。幻。と。嘆。れ。悲。し。い。叔。父。か。り。け。れ
 横山安秀。奴家。親。を。は。ひ。て。此。地。方。に。忍。び。居。る。うち。母。の。侍。従。を

夏憂^{らき}てのめかさるのれ嘆^{なげ}きの病^{まひ}とあり。なれ世^よの人^{ひと}と知りあひぬ此^{この}車^{くるま}
をが玉^{たま}手^てが物語^{ものがたり}めて知^しりしゆ。あひはくせん。叔父^{おじ}横山^{よこやま}の公^{こう}吏^しおれぬ
人^{ひと}みく。奴家^{やつが}成^{なり}りてその子^これ妻^めはし。名^な武^ぶが家^けを再^{また}興^{きよ}せん。只^{ただ}顧^{かへ}訪^{たず}め
ぬ。且^{かつ}て君^{きみ}をおきて化^{まじ}男^{おとこ}丹^に人^{ひと}んや。死^しをなきひて辞^{ことば}し。わが斯^{かく}とて
獨^{ひとり}枕^{まくら}を守^{まも}りて節^{せつ}を失^うはざむと。明日^{あした}にもあれ強^{つよ}く誓^{ちか}縁^{えん}せん
し。わが。かゝるべし。劍^{けん}を伏^ふく命^{いのち}を縮^{ちぢ}んり。はるるも。付^つりあは。憐^{あは}れと
おや。折^さり。折^さり。回^{まわ}向^{むか}をなして。あられと涙^{なみだ}おら。母^{はは}父^{ちち}へ。おれ玉^{たま}をす。み
出^でてまう。とや。姫^{ひめ}君^{きみ}の心^{こころ}をさ。とて。母^{はは}の。とて。殿^{との}れ。は。公^{こう}一^{いつ}。で。姫^{ひめ}君^{きみ}
の御^ご命^{めい}を。し。う。も。さ。も。お。り。あ。り。ん。り。姫^{ひめ}君^{きみ}の。心^{こころ}。の。上^{うへ}。過^{あや}失^{まち}あら。ぞ
過^{あや}す。ま。ふ。父^{ちち}君^{きみ}の。黄^{わう}泉^{せん}を。て。喜^{よろこ}び。あ。と。お。や。と。う。や。よ。く。お。や。し
つ。れ。の。人^{ひと}。と。か。き。口^{くち}説^{せつ}は。く。や。へ。れ。判^{はん}官^{くわん}代^{だい}助^{すけ}重^{しげ}の。姫^{ひめ}の。心^{こころ}。を。憐^{あは}れ。あ。ふ。

玉^{たま}手^ての。知^し道^{だう}理^りあ。ま。さ。と。な。難^{がた}面^{めん}も。な。が。ら。中^{ちゆう}あ。り。て。云^い出^でる。
姫^{ひめ}の。志^しを。ま。と。い。ひ。妹^{いもうと}が。誦^{じゆ}の。道^{だう}理^りあ。ま。さ。と。姫^{ひめ}の。望^{のぞ}と。辞^{ことば}あ。ら。ぬ。は。れ。も。仇^{あや}を
報^{あや}る。其^{その}前^{まへ}に。婚^{こん}姻^{いん}せん。の。婦^ふ人^{にん}。供^{くわん}夫^ふの。誹^{せい}謗^{ぼう}あり。足^{あし}を。忍^{しの}び。て。前^{まへ}の。ゆ。を。や
つ。つ。も。お。ら。横^{よこ}山^{やま}強^{きやう}暗^{あん}を。姫^{ひめ}死^し。と。い。ふ。わ。が。我^{われ}明^{あき}日^{にち}明^{あき}白^{はく}。姫^{ひめ}死^し。お。迎^{むか}へ
と。横^{よこ}山^{やま}を。送^{おく}て。は。豫^よて。の。許^{ゆる}嫁^{よめ}あ。れ。が。よ。も。辞^{ことば}し。ら。ゆ。と。は。し。此^{この}ゆ。い。う。あ
る。ひ。ま。ふ。と。あ。り。と。お。ら。玉^{たま}手^て首^{くび}次^{つぎ}ら。ら。あ。り。も。ら。道^{だう}理^りあ。お。り。て。を。明^{あき}白^{はく}
か。れ。と。口^{くち}前^{まへ}あ。り。の。ゆ。を。横^{よこ}山^{やま}と。一^{いつ}色^{しき}と。な。豫^よと。犯^{おと}す。れ。交^{まじ}り。あ。れ。且^{かつ}と。
安^{やす}秀^{しゆ}君^{きみ}が。如^{ごと}く。あ。ら。れ。が。雨^{あめ}を。一^{いつ}色^{しき}と。示^{しめ}合^あせ。て。い。う。あ。り。ん
謀^{まう}を。と。ま。し。信^{しん}ん。と。い。は。れ。仇^{あや}を。報^{あや}ゆる。と。い。ふ。と。あ。れ。ゆ。の。上^{うへ}に。と。危^{あや}し
且^{かつ}供^{くわん}夫^ふ婦^ふの。誹^{せい}謗^{ぼう}あり。と。宣^{のたま}ふ。と。も。心^{こころ}に。ほ。れ。今^{いま}新^{あらた}に。誓^{ちか}え。求^{もと}め。と。あ。り。
あ。ら。び。既^{すで}に。お。お。れ。許^{ゆる}す。は。は。夫^{おとこ}婦^{めかけ}を。あ。れ。の。睦^{むく}と。結^{むす}ぶ。と。い。ふ。あ。ら。あ。ら。あ。

度中よりして。旅宿とて。堪へぬ。主従らふ。旅宿。一。二。色。あ。は。れ。な。し。
 待。つ。た。れ。と。い。ふ。世。知。の。の。の。横。山。が。部。下。の。山。城。に。て。通。近。此。を。
 迷。ひ。し。め。の。の。切。害。し。て。其。城。を。奪。あ。つ。て。今。小。栗。主。従。へ。陸。奥。
 方。の。高。人。と。偽。り。し。う。と。吉。郎。十。一。人。の。光。景。が。寤。れ。ふ。傳。人。と。い。ふ。豪。傑。
 な。ま。は。は。は。東。國。方。で。す。あ。は。武。士。の。世。が。忍。ぶ。ま。く。あ。ん。
 き。ん。と。い。ふ。み。づ。り。あ。ん。と。下。し。て。害。を。こ。こ。も。な。り。か。く。暫。時。の。
 動。靜。が。寤。れ。し。小。栗。の。體。を。照。天。姫。と。示。し。合。し。は。こ。の。あ。れ。な。毎。夜。
 人。の。寐。靜。を。れ。を。伺。ひ。姫。の。の。の。に。通。ひ。たり。吉。郎。は。遠。く。を。付。く。こ。
 ころ。の。助。手。の。照。天。姫。の。り。と。小。通。ふ。こ。を。知。り。密。に。其。と。横。山。は。け。
 る。あ。り。し。う。安。秀。大。に。怒。り。照。天。の。姫。婦。我。子。と。忌。嫌。密。夫。と。い。ひ。
 こ。そ。か。さ。う。と。終。も。い。う。あ。ん。人。と。い。ふ。と。俄。に。照。天。の。飛。乃。

め。の。ま。の。め。い。ち。ち。つ。よ。ま。い。り。
 了。盤。を。居。捕。強。く。掬。同。と。い。ふ。彼。了。盤。呵。責。の。嚴。ま。い。堪。へ。と。助。を。始。
 ま。り。し。こ。の。夜。毎。又。い。ひ。あ。る。も。と。詳。し。白。は。及。び。安。秀。奴。を。
 彼。密。夫。と。も。小。栗。助。重。に。必。定。せ。り。速。に。彼。を。討。た。ん。と。い。ふ。あ。れ。な。終。を。
 吉。郎。誅。め。た。れ。某。熟。く。彼。們。主。従。の。辨。が。寤。れ。尋。常。の。人。と。も。
 お。ぼ。え。と。又。豫。て。小。栗。主。従。の。の。を。せ。く。お。り。れ。終。世。と。い。ふ。豪。傑。な。る。
 は。し。く。教。を。催。し。討。た。ん。と。せ。ん。我。が。方。も。害。せ。ぬ。は。の。の。多。う。お。べ。
 其。上。全。く。討。た。ん。と。も。も。の。難。な。れ。謀。を。り。て。討。た。ま。は。し。と。速。に。
 安。秀。実。の。と。あ。ひ。と。と。奈。何。謀。を。用。ん。と。評。議。を。知。ふ。吉。郎。安。秀。進。
 出。て。や。う。あ。い。と。れ。ゆ。く。患。あ。る。こ。の。あ。い。と。と。父。が。耳。に。い。は。し。何。と。
 せ。ら。ん。私。法。の。横。山。を。拍。く。た。い。ゆ。喜。び。と。千。金。の。謀。な。り。と。す。羽。三。日。
 横。山。安。秀。自。ら。吉。郎。が。許。は。赴。た。れ。ぬ。様。で。示。し。合。は。る。こ。と。な。れ。ぬ。

主吉郎横山と助重が居る次の間詰入酒宴を催し又と興なる
酒既子園より及び一軒横山とく酒中酔たる時めて端居せがや二時失
く。助重が居る隔の紙門を開け助重と向き面と逢たり。横山
然るるおりちめて小栗をえり。はぶふへうな助重をなれぬと
くるまぬめてこの珍し小栗を何故かぬぬと云うけられ
て助重不審眉をたてて横山と老着の角着のく又驚た爾宣
その横山をめてはしきうくるおひひけとてきりして時付さ
なりり。其時横山云くりり其妹婿名武馬光横死の后妹
徒付と照天とを其はひ退く。此地方より必ひ居るらち照天や成長
それの豫く許嫁めれば足下のためと送らん存はれと持氏云
は不審と夢りしりの女見なれ昔とへ居る。今ハ奈何もせん

足下我子の如根と同りやと云うち小妹徒付不圖も世も亡きく
徒付不意彼の事やまきれ一日とてさうち足下満重屋の
を慕りまふは。はくちけあつる。この志をいと想ひ感ひは
熟く多くかたは村人の信り知るもの何國より必ひあらと
姫と誓婚さうとて所々方々と捜索をせしうとてさらけ其行
めりし。今日不意此正対面をけること過世の契縁とせまる。
我家もあてして前の約と全うしんとはゆか小栗は横山の
信の中なることとて父と母と深く疑ひ着自の回意なくは
居るし。漸めて云出さるる直つとて父の怒気を受ふの
家も亡びぬれらるる。それとも無きとて空しく思ひ
結芽の果のさるおきを憐れとおぼし古け好芽と今に捨
るる

あつを無多ゆ。用意をこころ。好し。これ。明日を。比。籠り。する。あり。感謝。の。心。
と。あ。んと。中。は。横山。を。越。ひ。然。る。が。明日。を。我。家。の。は。び。り。の。心。
待。ま。わ。る。こと。と。云。つ。主。吉。郎。は。對。ひ。汝。明日。此。客。人。と。我。必。し。は。し。ま。
と。と。親。父。へ。金。小。栗。を。別。れ。出。て。な。り。去。る。小。栗。の。十。人。の。侍。臣。は。
任。集。會。密。に。云。へ。り。は。我。主。從。忍。び。と。云。ぬ。横山。を。中。も。知。り。
は。る。こと。の。不。思。議。の。彼。と。素。より。心。よ。め。ぬ。回。ら。ぬ。今。の。心。
懇。意。の。心。を。云。父。の。心。を。云。父。の。心。を。云。父。の。心。を。云。父。の。心。
さ。あ。れ。彼。が。籠。り。往。か。し。と。危。う。げ。と。云。往。か。る。時。の。臆。し。る。心。
い。い。と。ん。そ。の。念。の。事。に。横山。何。の。の。り。と。云。做。ん。明日。彼。が。敵。に。從。て。
做。ん。中。を。着。ぐ。と。ある。ふ。十。人。の。從。は。ホ。一。般。に。横山。が。籠。り。赴。き。
の。心。と。云。支。へ。と。あ。め。ね。と。云。彼。を。何。の。謀。と。云。置。ん。も。知。ら。ぬ。心。

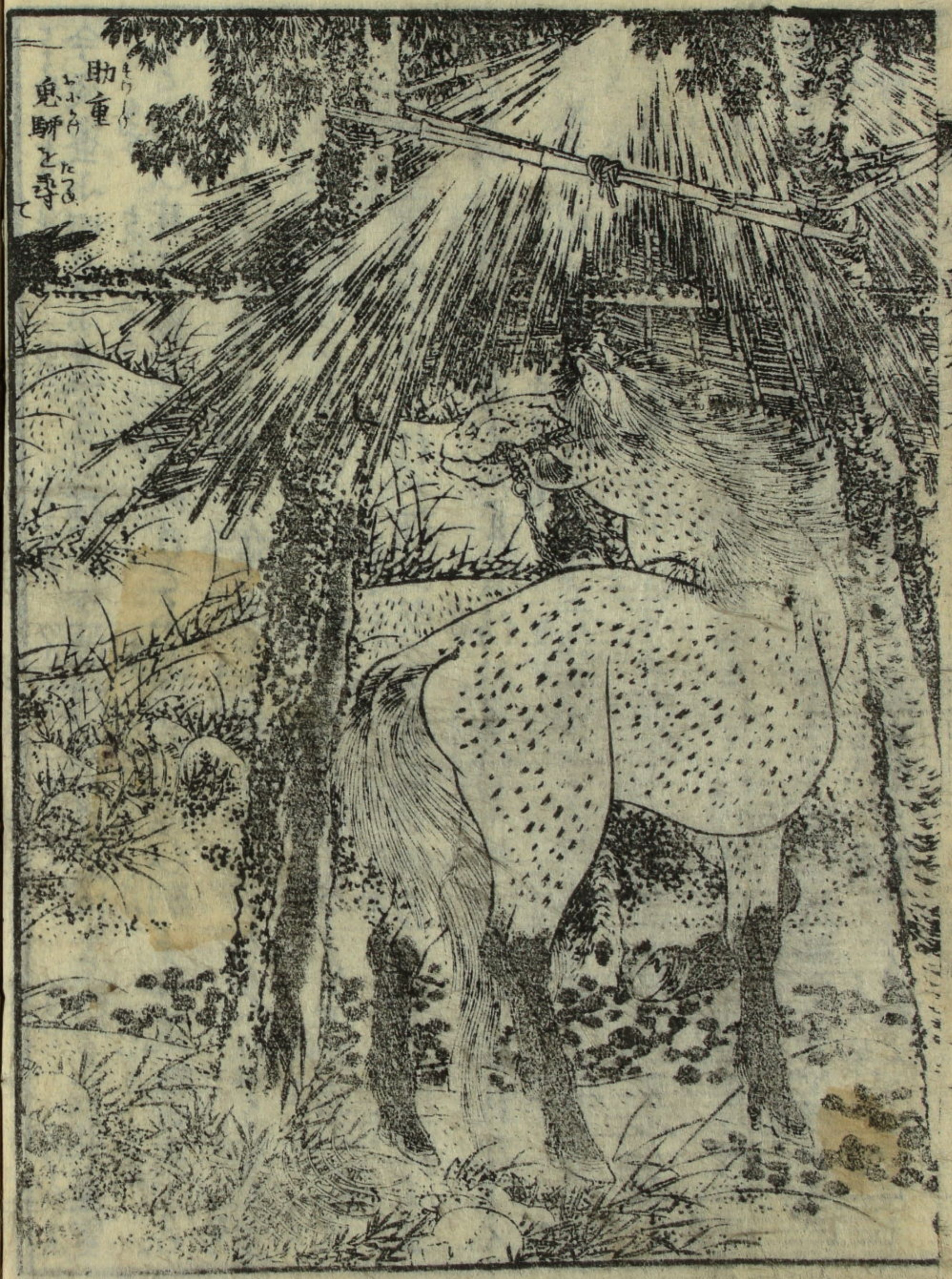
今夜蜜小姫君お遭ひ横山が隠謀は父多入しと誂まて助重実
りと肯ひ其夜蜜小照天のりとお忍び行通ひ馴とは筑垣の崩より
忍び入んととは小人妻く集めても衛居るべしと云はせり空
志く旅宿は立戻り十人の人々對ひ奉の群もくくを物語れば加茂
女加を即進と出でり横山既にを殿の姫君の心りへ通ひし
ことを知り番兵と置くとことと防に蜜計を知り志しと云はせり人
あつを無多ゆ。用意をこころ。好し。これ。明日を。比。籠り。する。あり。感謝。の。心。
と。あ。んと。中。は。横山。を。越。ひ。然。る。が。明日。を。我。家。の。は。び。り。の。心。
待。ま。わ。る。こと。と。云。つ。主。吉。郎。は。對。ひ。汝。明日。此。客。人。と。我。必。し。は。し。ま。
と。と。親。父。へ。金。小。栗。を。別。れ。出。て。な。り。去。る。小。栗。の。十。人。の。侍。臣。は。
任。集。會。密。に。云。へ。り。は。我。主。從。忍。び。と。云。ぬ。横山。を。中。も。知。り。
は。る。こと。の。不。思。議。の。彼。と。素。より。心。よ。め。ぬ。回。ら。ぬ。今。の。心。
懇。意。の。心。を。云。父。の。心。を。云。父。の。心。を。云。父。の。心。を。云。父。の。心。
さ。あ。れ。彼。が。籠。り。往。か。し。と。危。う。げ。と。云。往。か。る。時。の。臆。し。る。心。
い。い。と。ん。そ。の。念。の。事。に。横山。何。の。の。り。と。云。做。ん。明日。彼。が。敵。に。從。て。
做。ん。中。を。着。ぐ。と。ある。ふ。十。人。の。從。は。ホ。一。般。に。横山。が。籠。り。赴。き。
の。心。と。云。支。へ。と。あ。め。ね。と。云。彼。を。何。の。謀。と。云。置。ん。も。知。ら。ぬ。心。

沈吟してあはれなるが御前をて云へらく加茂郎が父あたる処大くく差す



小栗助重
并侍臣

道竹
遺子



助重
鬼駢と尋

小栗巻之五

然のれ我十人の豪傑あり。彼ハ鳥合の盜賊なり。しうも猛しとてあつても
 恐ろしくに足らぬ。明日速に横山が館に赴き其財宜しより却て横山に
 家を生捕獲敵一色経秀をとりておひきとりて術をせんをぞ人々勅て
 我ヲ助くんと念然として父はあはれ維めて再び誅入るものもあらず
 其命もすしりたり。嗚呼小栗助重智謀勇畧あり有ふよめて横山
 と慢り。加茂が誅を馳せ横山が館に至り終にその謀計も當られふと誤
 の厄難中かゝるに小人とて慢べくはとて古人の確言宜るるにや
 斯てその翌日にありし小栗判官代助重多しく狂ひ十人の豪傑ハ
 太刀衣服も至るまで善くそして助重も陪從横山が館に赴けりしに
 彼方にも像て其宿儀やあつたりと門辺ハ盛砂しといはれらるも掃除
 きて待受たり。小栗既其門辺に到るに家長めたるは漢子出さるる

正堂も侍ひ烟茶の餐意するに及ぬ。主横山五人の子供を引俱し出きて
 對面し我子を一助重よひたのめられぬ。助重も十人の侍臣に横山乃ん
 云ふ。明日夕へすむじしるるこゝ今日照天不足下へ送りし人彼を
 今父も母もなり。親となるべかりのほし我不肯つりといふとも照天が叔父
 なるが及ぶ我女兒にして誘ふべし。されば公將塔改りての見えおぼゆるは
 物なれものいふ。そとてとわらぬ。左郎も給合浪を鏝しは鞍籠を小栗
 が前へさし居たり。この以流のこゝ取つては品められと聲し出さるる
 そゆり我まご女塔よりしての引出物も望まぬあり。とすゆれば助重も
 籠をお裁れ感謝を述べ后もそなり。我の旅中とらひ父の擯斥を
 既三年経るれば一物の時さしきりおぼら物もさるるれは。そもいふ

物の望もあつては横山うち笑ひ近日子供がほつり馬のぬがのあつりの
 荒馬なれがなふたへと後園の郊辺に繫ねるなり其馬の鞍おひ
 一馬場あてて又せまこれお上り引出物のあじとやと助を公の裡
 むの此馬こそ故のへ爾ととも馬ふらふあつるのや
 くらら笑ひつゝ回意はつるこの心とよの易れとふとと其馬場あつる
 える方お案内して多しとこもなげおまのつれが横山おひと郎や
 居る案内はわらせよとあはれと郎安武いざとて前おすめ
 小栗判官代助を十人の前堂を引俱し安武殿あついで前裁のせり
 歩こつ三丁よりゆして一箇の門と出づる助は郊原あり此時候
 九月の末の秋霧朦朧と四方ふたつりつれお枯残る秋やほ
 の困お音とるる憐れとさぬく笑へる此村に郎安武遙は指はあて

對ひお入へては細流も添はる森こそ彼馬を繫ねるさしと彼所
 まても案内しつゝなれと馬場のゆけともせんごつらあつ
 より人々の彼所へおせよと云はれ慌忙けお走り去る小栗主従目と
 目を又合しと郎が案内とるるぬをほざれとや此馬子細を有ん
 かあつてよとりのりる人への命さてもめらと此西の望入でつ
 ぐ不意とりの侍人と互におつるを励し生茂るる萱野を分て
 るるり行既も概近くするは秋風の凄然と吹あつれ千草もささ
 虫の音のそれらあつる哀しげな笑つるのこそあつる主従四方
 と殿堂耳をそむて笑つて笑けがふく人お呻く声ありとをさし何
 と其声お知る人お歩行お歩行お呻声の近くするお其辺の白骨野
 として砂石のさしと従これと人怪しとさつりあつる斬罪とれ

場あやと丈あゆのする萱かこめて四方をさぐるあ死して幾日もうね
 とおわらう年久散せはうとくまうび居たり。それの中あまはま小
 に綁められ。六十のまりの漢子のめいと瘦瘠しく顔は炭のよう。
 まみらるる若しげも呻れ居たり助重とれは池庄司にて生録故
 を同のしゆ彼後子若しき息が衝くまうしはは我が同のしゆあ
 方と奈何ある人もくばらんとしる庄司今此下ふはつこうで
 わら。小栗判官代助まう従まり汝が身の上よりしてこふ綁められ
 はらうしを流りゆくとあれ彼漢子いと驚きひは風情めて首は
 りさげ助重を着一着て下とす。君の甚どる知らしめさうえんれ
 系と君がよく知とり斯まうとりの名武たる光の下僕と道助
 とやと考めてはりの前年う人篤光相模川を横死の如り某

供あてひははらう。さても主人篤光の水死を横山が西なるめてとるる。
 其附のころ爾とまうひきて篤光横死の附の光景を詳らふのど
 某もその附川をらちいれぬはと幸ひ水心はほるれば水中ふら
 とまればとせま。水の底は流り幸して命助でし主の死する
 とるるがらのめく誰か還るが身に分疏をがく。生國武義乃國
 金澤なる彼あも退忍び居らうら勿らま家あてひ内君も姫君
 もその行状を知らざればいと走赴の如り人も在家知れれば詮と
 ね。影附故郷あひはらう。熟く相入を下郎と云わらう。この
 目をのめらう。こはくこのまう止るる。せめては能く故郷に
 内君や姫君お告まわらせんと故郷をまう。西の方主の
 尋ね巡るとかひあられれば下まう。故郷を還ると此地方をさるし。

小栗判官代助

一五

といと苦いげ物染終らばしくなりやう小栗の道助がめが
 刃を憐みしやう物語を熟くぞとどかきつらうか
 笑て云うのむねの鳴呼愚なる安秀うね我能角の其むり
 おぬて彼とら法のの子に論じし我上小出うこと社
 志て我は能き懐り。されが今不図此下よまを幸ひ昔の怨
 報んとそはうるべ。名ひまうせむ横山へ舅の敵を身
 此老賊を殺さむやうといえまけが池庄司と初め風間田
 を揚り腕を摩りて悪れ横山が行状お命のどく早くこの
 多人とそをりかほを加友又身とれを止め君をどじり人
 こと那がら君の天候傳おせむの仇あり。それとも討を
 志のふは是何の道理ぞや。今横山が光景を察すふを部下

名 遺失のら一色とい誰う討て大殿の修羅を安ん
 前の小奉へ突流のるお千金の誓ひをせむとやさばやうと
 小栗此流を触くやう其憤をおさるる。雨のれ一旦横山
 今んと約をば此奉おむべのめと。再び草紙あみうて一
 かお到て其光景はるる。太中ゆる様は蜘蛛十文字おみ
 大螞蝗絆りて打つけらる。縁所におぼく。後お人の出入
 扉あり。堅く貫木と鎖せり。蜘蛛の隙より裡を窺ふハ
 ゆ太く違へた駟な馬のり。髪も鬃も生かぶるを移も定
 うふえと総と眼とどく見くとして。乱と一髪友の隙は
 閃くとして電光のこじ尾の長くして身丈のあやう。太
 四方へ引はり較ぶるあが。只今人々をい例の人林らう

まゝうれへて嘶けりさしむ丈夫おかしうれ既揺動つくりりれあて
 小栗これと着て天晴良馬うねる幽王の八駿頂羽が馳りもほろね
 ぞ。たゞ此馬もあれ鑑のよびのり。そあほさるこやふのへきと
 既五をんととれを如家加次郎をみ出君おあひて此馬を如ほりあめ
 がたあめあれ種と知る異なる馬もかろぐしくなあめひいあひこらも
 過失あめあ悔してかへぬ車うり。不如おぼしきりあめと流る助重
 びを左右うりうちあり否汝が凍さるこあがら横山我と亡んと此馬の
 カを借るりまあほさるはとれら當座の恥辱と少女なられと横山を
 ぼがれを罪としうりある謀を用人も知へくうびそも馬のさたが肩ひ
 きたる行をりて天下を利するものこ。うりも猛しとゆふとも素これ馬
 うねりて人をまあせとていふとあへん少しもん天懐せとていふと

と云はく。風間兄をさして鬼駢を牽出はし横山がふへ一鞍籠をかけ
 手鑑かひりりゆりてと持まひと静まりあ歩まどおさ。さ。も。も。猛き鬼
 評の小栗もあつたれ此二も騒かどる細、まおく歩に思議も
 怪しれ。十人の郎きこの光景をんて流く感賞。君の馬ま。ま。あ
 ころ傭人の及ぶれあふにとる豫を知れども此馬もあひていふ
 あへん。とらんと案の類ひ。斯あつたへ。とら想ひもかけ。此馬の
 此業神機微妙。我々の及ぶれは。は。は。と。す。れ。小栗助重。こ。こ
 笑して我。か。や。と。あ。あ。は。は。と。思。ひ。は。な。い。と。ま。い。り。た。馬。も。有。る
 事よ。い。や。と。庭。あ。い。と。横山。鼻。あ。る。と。へ。と。は。の。前。裁。の。方。へ
 赴。が。十。人。の。郎。き。馬。の。四。方。と。り。困。と。と。耳。道。を。分。け。行。さ。る。
 此。村。三。郎。安。武。助。を。が。不。変。死。ん。と。と。中。途。と。と。出。ま。り。し。が。小。栗。鬼。評。も



いさよ
鞭く馬術の
妙と宗を



助重
鬼駟

うち素寛くして歩ませぬふことしうふと難くしうとてあつた
さあやてんや馬場のりうけも整ひたる足まてりやうもあつた
しうとて馬場ふ案内一父の安秀が斯と生れぬ横山安秀の業
相違し頼まきふれ鬼駟をいと易く歩ませぬこと不思議なる
再のれ素鬼神もあつた終に其術をばさし仕技にして馬は食せ
と子供五人衆引俱し馬場は出馬の助重安秀が斯とてさうり下
一れして下りぬ糸切きう馬を好む此年以常陸は居つぬ其筋
の馬ども多く歩ませぬしうと此鬼駟がことなるり天晴の良馬も
なげはとありうけぬ安秀のめり終にとまじはあつた
笑てしうけぬ前刻も中しう此馬えりける処尋常ふあ
なれぬさうと終のめりめとを歩ませぬしうと猛りしうとて波も

ゆと空しく一雁が駟もあつた足下斯なる容易きあつた
こと實ふ其人と歩ませぬしうとてさうり足此馬の終もさうり天晴
足下馬道の聖人さうとあつた此馬もせやうと其盤
さうり椅子乗してさうり歩ませぬしうとてさうり小栗心裡彼我難事
を云うけ疎失させん謀まり悪さも悪しと念はる完示と打美
某爾の就案のころ足下にてはさうり終に横山及の必まのめりしう
せん風情なりさうり歩ませぬしうとてさうり安秀速なる馬
さうり歩ませぬしうとてさうり歩ませぬしうとてさうり歩ませぬしう
心ほりて回意してま去るあつた椅子と其盤とを推し出馬場中
央のさうり歩ませぬしうとてさうり歩ませぬしうとてさうり歩ませぬしう
椅子持てさうり歩ませぬしうとてさうり歩ませぬしうとてさうり歩ませぬしう

神藏

つと野にみおて馬場の東詰に押建する。其光景仁王を造り扱
くはがごとく。勇すくちとていづもぞこへくつをね小栗とこと
て鬼駢みらちき馬場と西する静るおまやせら湯の西詰にて
三四回輪をふけ。一鞭撃よと着へし馬の平身みらちの東に
池より其迅こと矢よりのしや。庄司助長が持は樹子を走せ
昇ることた。平地を行がし。めをや庄司樹子を持は堪はと着
此も動く地より生ゆるごとく。た目か色色変ることは小栗
之馬が扱柄おをり上手細をゆる扇をきめて静所休と静
と下せら。その光景とて居る程のみの小栗が馬術庄司勇力
世も少なれ事なれが咳然して歎賞せり。横山の小栗主従
が武威をこて心裡ゆる怒るれおて我力をりて討めんこと難

多く尚鬼駢をねと想へば小栗が術助長が勇力を賞一再び
其盤ぶのこて又望めぬ助重辞まどして又鬼駢と歩ませ其盤の
りとお近げも盤の上へ馬の四足をよせ。盤中んあまををた
小栗手綱をかりりて馬次踏くせうね小た。跡の蹄のこを
の上おちのあがり。三回すて盤の四方を歩く。其光景人間華
くくがね物の人く舌を巻賞讃せらはとこのりたる。

